

「シンクロニシティ ～偶然の出会い～」

やまがたグローバル教育研究会事務局長 奥山 和司

シンクロニシティとは、「意味のある偶然の出会い」あるいは「予期せぬ重要な出会い」という意味で、最近読んだ『人生の意味』という本に出てくる言葉である。「人はさまざまな役割を持って生まれてくるが、それは最初から意識されているわけではない。シンクロニシティによって導かれながら、次第に自分の役割を認識していくようになる」というのがこの本の趣旨である。

ふり返ってみるとこの本との出会いそのものが、私にとってはシンクロニシティであった。ある晩ふと『書店に行ってみよう』と思い立ち、閉店間際の店内でたまたま目にとまったのがこの本であった。

私は現在、やまがたグローバル教育研究会を主宰し、その事務局長をつとめているが、この研究会で取り組んでいる「ワークショップ」との出会いも全くの偶然であった。

青年の家に勤務していた一九九六年、国際交流事業の担当者として東京で開催されたセミナーに参加した。その時の「BARRINGA」の衝撃的な体験は、今でも忘れることができない。それは、トランプを使った簡単なゲームで、より多くのカードを集めた人が

勝ちとなるルールであったが、このゲームを通して、自分が人の能力についていかにひどい偏見を持っていたかを思い知らされたのだ。

「偏見を持つてはいけない」とは当然のこととして理解しているつもりであったし、高校の教員として生徒にそれを教える立場でもあった。その自分が、「偏見を持っていた！」ということは大きなショックであった。

しかし、それ以上に、そんな自分の本当の姿に気付くきっかけとなったこのゲームの素晴らしい効果に驚いた。楽しみながら活動できるシンプルなゲームでありながら、コミュニケーションの重要性や異文化の疑似体験までできる実に奥深い内容であった。そして「ワークショップ」という手法に魅せられ、これを継続的に研究し、さらに県内に普及していきたいと考え、現在の研究会を発足する端緒となったのである。

現在では、県内でも「ワークショップ」という言葉がいろいろな場面で聞かれるようになり、私自身もこのような講座の進行役（ファシリテーター）として、講師の依頼を受けるようになってきた。これも、たまたま参加したセミナーで「ワークショップ」に出

会ったことがきっかけであり、偶然の出会いとはいえ運命的なものを感じずにはいられない。

さらに、この研究会の活動を通じて、各地で地域づくりに取り組んでいる方などさまざまな人との出会いが生まれ、NPO関係の活動にも取り組むようになってきた。最近では、地元白鷹町で、休園になった保育園がリニューアルオープンすることになり、この施設を拠点として活動する団体「白鷹ふる里体験塾」の立ち上げに奔走している。

これまでのさまざまな「偶然の出会い」をふり返ってみるとき、その一つひとつに大きな意味があったことにはあらためて驚かされる。私自身、いまだに「自分に与えられてきた役割」が何であるか、はつきり認識できていないわけではないが、これまでの出会い、そしてこれからの偶然の出会いを大切にしていくことにより、自身の役割に導かれていくような気がする。

この原稿の依頼を受けたこともひとつの「予期せぬこと」であったが、この拙文を読まれた方と何らかの新たな出会いが生まれるとすれば、それこそまさに、私にとって大きなシンクロニシティになるであろう。